

中国の英語教育がめざすもの

—— 小・中等英語教科書に見える中国文化 ——

西 蔭 浩 子
岡 野 恵 子
平 石 淑 子

1. はじめに

日本の英語教育は様々な改革が提言され実行に動いているが、アジア諸国の中で遅れをとっているのも事実である。特に中国では英語過程基準（学習指導要領）で統一された小学校から大学までの一貫教育が実施され、そこには参照すべき教育上の特徴が数々見られる。中国における小学校3年生からの英語必修化は2001年に始まっており、現在は北京、上海、天津などの大都市では、小学校1年生から英語教育が実施されている。中国の英語教育の特徴のひとつであり、日中の英語教育の成果に大きな違いをもたらしている要因のひとつが初等・中等教育で使用される英語教科書そのものである。

本稿では、中国の小・中等英語教科書にどのような特徴があるのか、特に教科書の中に見られる中国文化の取り扱い方、その発信を促す仕組みに着目する。中国の教育理念について、鈴木（1999）は「外国語教育は自国を宣伝するための『自己顕示・自己宣伝型』である」と指摘し、小池（2007）は「国際理解を通じて自国への意識、自信、愛国心の発揚を目指している」と述べている。外国語を学ぶことの目的が「愛国精神」を育成するためのものであるならば、その学習の基盤になる教科書においても中国文化を礼賛し、他へ発信していく準備が施されていると考える。

中国の英語教科書が「自己顕示・自己宣伝型」かどうかを検討するために、北京の初・中等学校で使用されている英語教科書『英語一年級』から『英

語六年級』までのシリーズと、『英語七年級 Go for it!』から『英語九年級 Go for it!』シリーズを扱う。

研究目的は2つある。第1は中国の小・中等教育における英語の教科書が「自己顕示・自己宣伝型」であるかどうかを確認し、自文化と異文化をどのように扱っているかを調査することである。第2に、北京市で使用されている中等教育の英語教科書を、日本の『New Crown English Series』と比較し、中国独自の教育内容を検証する。

日本の英語教科書は、英語文化圏への憧れや共感を促し、外国の文化を受容するメッセージ性の強かったが、最近は日本の生活習慣や文化背景を盛り込むようになってきている。しかし、より発信型の英語使用者の育成が期待されている日本では、自文化を発信することを教育理念として掲げている中国の教科書から学べるが多々あることを示し、4技能のバランスの取れた英語運用力を持った日本人英語学習者を育成する英語教育という視点から論じていく。

2. 中国の小・中等英語教科書の背景

中国では、2001年1月18日に『小学校英語課程教学基本要求(試行)』(以下「基本要求」とする)が発行され、2001年度からの新課程で、初等教育から後期中等教育までの小・中・高の計12年間の一貫した英語指導体制が組み立てられた。

『全日制義務教育 普通高級中学校課程標準(実験稿)』(2001)には、初等中等教育段階の英語教育の任務の1つとして次のような内容が掲げられている。

児童・生徒が世界を理解し、中国文化と西欧文化の差異を理解し、視野を広げ、愛国主義精神を育て、健康な人生観を形成し、自分たちの生涯学習のための望ましい基礎を固めるようにする。(下線筆者)

今回研究対象とした小・中等英語教科書は、この「基本要求」の指針に沿って作成されている。

中国と日本では英語教科書の作成過程そのものが異なる。中国の英語教材作成の方法には、①外国からの直輸入、②外国の専門家と作成、③外国の教科書を中国向けに改訂、④中国独自に編集の4パターンある。対象とした教科書は、第3番目の「外国の教科書を中国向けに改訂」パターンに相当する。

北京の初等学校で使用されている英語教科書の中から『英語一年級』（以下『英語1』）から『英語六年級』（以下『英語6』）までのシリーズを対象とした。北京の人民教育出版社がカナダのLingo Learning Inc.社の教科書を中国向けに改訂したものである。

また、中等学校向けの英語教科書は、『英語七年級 Go for it!』（以下『英語7』）から『英語九年級 Go for it!』（以下『英語9』）シリーズである。このシリーズも、人民教育出版社がアメリカ合衆国のHeinle, Cengage Learningが出版していた“Go for it!”を中国向けに改訂した教科書である。

中等学校の英語教科書の分析対象に『Go for it!』の改訂版『英語7』から『英語9』シリーズを選んだ主な理由は3つある。まず、中国の33省の中の29省で使用していること、次に毎年2500万人の中学生がこの教科書で勉強していること、最後に、中国版に改訂するに当たって、中国人教師、研究者、中国全土各省の教育委員会が協力し合って改訂したことである。それ以外にも、毎年1万人以上の教員研修やセミナーを実施し、継続的共同リサーチを行っているなど、広い中国の中で汎用性が認められる。

3. 初等学校における英語教科書の特徴

『英語1』から『英語6』シリーズは各級に「上册・下冊」が2冊あり、全12冊で構成されていて、各教科書の巻頭には学生向けに各級の到達目標が明示されている。12冊を通して共通しているテーマは「英語を楽しむ」ことで、英語の歌や物語、ゲームなどが盛り込まれ、生徒が英語の世界に親しむことができるように工夫されている。

特筆すべきは『英語3下』の到達目標のひとつとして「外国にわが中国を理解してもらう」ため「英語を話す国々の文化を紹介し、中国の文化を紹介し、文化を超えた交流の実現に努める」とある。

英語は文化や科学の知識を学び、世界の様々な情報を知り、国際交流を進めるための重要なツールである。英語を学習し、習熟することは21世紀に際して我々に与えられた基本的な要求である。

こうした到達目標には「自己顕示・自己宣伝型」や「愛国心の発揚」は見受けられず、むしろ中国文化と西欧文化の差異を理解することに重きを置いている。

教科書全体を通して顕著なのは、欧米文化の紹介が多いことである。

教科書にはStory Timeという読解セクションがあり、いろいろな国の文化を紹介している。『英語1』から『英語6』までで取り扱われている内容を調べてみると、欧米文化に関連したテーマが10に対して中国文化に関連したテーマは3に留まっている。欧米文化の内容は、サンタクロース、イソップ物語（カラスとキツネ、3匹の子豚、ウサギとカメ）、アンデルセン童話（みにくいアヒルの子）、コロンブス伝記などで、欧米の子供たちが親しんでいる物語がそのまま紹介されている。

一方、中国文化にしてはロボット、中国の大みそか、中国の農民の3つで、日常的话题である。ロボットが取り上げられている原因は、コンピューターや科学・数学などの各学科の能力を高めることが英語の到達目標のひとつになっていることにある。

教科書で紹介されている人物は、チャップリン、エジソン、ヘレン・ケラー、ニュートン、レオナルド・ダ・ビンチからJ.K.ローリング、マイケル・ジョーダン、ビル・ゲイツまで幅が広い。

それに比べて、中国文化の発信については、中国の観光地や食事の紹介が主で、人物は『英語6』で初めて紹介される。詩人の李白、画家の徐悲鴻、映画俳優のジャッキー・チェン、卓球選手のDeng Yaping、物理学者のChenning Yangとわずかでしかない。

初等学校の英語教科書の内容は、「愛国主義精神を育てる」というより「欧米文化を受容する」傾向が強いといえる。

4. 中等学校における英語教科書の特徴

『英語 7』『英語 8』は、初等学校の英語教科書と同じく「上冊・下冊」が2冊ある。『英語 9』は全一冊のみで、全5冊である。巻頭の学生向け到達目標は、どの級も同じで英語の運用能力を高めることが柱になっている。文化教育については次のように明記されている。

言語の学習と文化の学習は密接な関係にある。言語は文化の上に成り立っているからである。文化は言葉の魂である。自分たちの民族の文化や、英語を話す国々の文化、英語を話さない国々の文化など、たくさんの文化的内容が盛り込まれている。

「たくさんの文化的内容が盛り込まれている」大きな特徴のひとつに、英語の人名の多用が指摘される。中等学校3年間の教科書の中で、英語の人名は153使われている。これに対して中国の人名はわずか37で、英語の人名は中国の人名の約5倍に上る。その多さを証明するために、日本の中学校で採用されている代表的な教科書のひとつである『New Crown』シリーズを調べた。その結果、3年間で英語の人名は13に対し日本語の人名は20である。

『英語』シリーズでの英語人名頻出回数の高さは、中国がいかに欧米社会や文化を意識しているかの表れといえる。

表1 『英語 7』『英語 8』『英語 9』にみられる英語人名と中国語人名の頻出回数

	7上	7下	8上	8下	9全	合計
英語人名	21	33	41	29	29	153
中国語人名	5	7	9	8	8	37
その他の人名	0	0	0	0	2	2

表2 『New Crown English Series 1』『NCE 2』『NCE 3』にみられる英語人名と日本語人名の頻出回数

	NCE 1	NCE 2	NCE 3	合計
英語人名	5	3	5	13
中国語人名	2	9	9	20
その他の人名	2	1	2	5

次に『英語 7』から『英語 9』シリーズの Reading で取り扱われている欧米文化と中国文化の頻出回数と内容に注目する。

欧米文化は 11 回で、中国文化は 10 回とほぼ互角である。内容は欧米文化として紹介されている Reading は「世界の誕生日」「ミッキーマウス」「感謝祭の料理」「アメリカ人身体障がい者の登山家」「キング牧師と 9.11」「クリスマススピリット」「予期せぬ出来事 (9.11, 地震)」「エイプリルフール」と祝祭日や事件などである。

一方、中国文化については「勤勉な小学生」「ちまき」「雲南省のビーフン」「孫悟空」「中秋の名月」「Made in China」「中国の伝統芸術」「中国茶」「中国の音楽」と、「基本要求」で掲げている「中国文化と西欧文化の差異を理解し、視野を広げ、愛国主義精神を育てる」という精神に合致した内容になっている。

日本の『New Crown English Series』で紹介されている欧米文化と日本文化を比較してみる。

欧米文化は 5 に対して日本文化は 7 で、それ以外の異文化が 4 紹介されている。

欧米文化に関しては「アメリカの学生生活」「アロハ」「ウルル」「お気に入りのことば」「I have a dream」とあまり祝祭日や事件を取り上げていない。

それに対して日本文化は「日本の四季」「すしの楽しみ方」「落語、外国に行く」など中国同様、日本の習慣やサブカルチャーが紹介されている。

中国が発信する中国文化を詳しくみてみると物語、食べ物、偉人が取り上げられている。

初等学校の教科書では、イソップ物語やアンデルセンなど、欧米の童話や物語が Story Time を占めていたが、中等学校の英語の教科書は中国の教訓的な物語を読ませる。例えば、Yu Gong Moves a Mountain は「愚公山を移す」という説話である。どんな困難なことでも努力を続ければ必ず成し遂げられると

いうたえとして用いられる。毛沢東が演説の中で引用して有名になったいきさつがある。また、Hou Yi Shoots the Suns は中国の古代神話に出てくる射手で、中国の英雄として写真や切手になっている。

このような Reading 教材の数は多くはないが、説話や故事を英語で読むことで、「自分たちの民族の文化」を理解した上で、『英語 3 下』の学習目標として書かれていた「外国にわが中国を理解してもらう」ため「英語を話す国々の文化を紹介し、中国の文化を紹介し、文化を超えた交流の実現に努める」をいう姿勢を現実のものとしている。

中等学校の英語の教科書にみる異文化教育は、1 年生は「欧米文化吸収」で、2 年生は「欧米文化受容」、そして 3 年生は「中国文化発信と異文化融合」という流れになっているといえる。

5. 結論

中国の英語の教科書が「自己顕示・自己宣伝型」ではないかという仮説を立てて教科書を調査したが、「異文化受容型」ではないかという分析結果に至った。

初等学校英語教科書

1 年生－2 年生	英語基礎力養成
3 年生－4 年生	欧米文化導入
5 年生－6 年生	欧米文化吸収

中等学校英語教科書

1 年生	中国文化と欧米文化の差異意識
2 年生	欧米文化受容
3 年生	中国文化発信と異文化融合

初等学校教育では英語の基礎力を身に付け、欧米文化を学びながら、学年が進むにつれ、中国文化に気づき始める。中等学校に入り、中国文化と欧米文化の差異を認識し、3 年には中国文化を発信すると同時に欧米文化との融合を図ることができるように、緩やかな流れが作られている。Reading 教材

が中国文化と欧米文化のバランスを保っている。

中国の教科書と比較すると、日本で使用されている教科書の方が、中学校1年生から日本文化や日本の生活を意識した構成になっている点は興味深い。

6. 課題

教材研究として取り上げた教科書『英語』シリーズは、「外国の教科書を中国向けに改訂」したものである。それゆえに「欧米文化との融合」を図って作成されたともいえる。中国独自で編集された教科書を調査すれば、本稿の結果とは大きく異なった分析結果が出ることは容易に考えられる。

2つ目の課題は、中国の教科書が「自己顕示・自己宣伝型」だという指摘は15年も前のことであり、新しい「基本要求」が出されて2011年には教科書が大きく変わっている。こうした事実を踏まえて、新しい中国の英語教育の方向性や変化を正確に把握する必要がある。

参考文献

<論文・書籍>

尾関直子 (2006) 「中国の英語教育から見えてくるもの」『英語教育』 pp.23-25

小池生夫 (2007) 「国家の外国語教育政策の5つの型とアジアの英語教育の変革」『英語展望 2007年増刊号』No.114, pp.36-41

鈴木賢治 (2000) 『英語教科書と異文化理解』川村学園女子大学研究紀要 11

鈴木孝夫 (1999) 『日本人はなぜ英語が出来ないか』岩波新書

新保敦子 (2011) 「現代中国における英語教育と教育落差」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第21号 pp. 39-54

中華人民共和国教育課制訂 (2001) 『全日制義務教育普通高級中学英語課程標準 (実験稿)』北京師範大学出版社

鳥飼玖美子 (2002) 『TOEFL・TOEICと日本人の英語力』講談社現代新書

宮内敦夫 (2005) 「中国における英語教育の現状 ——日本の英語教育を最

高するために——」

『国際地域学研究』第.8号, pp. 243-251

文部科学省 (2011)「中国における小学校英語教育の現状と課題」

<教科書>

[初等学校教科書]

人民教育出版社 (2012) 『英語一年級上冊』

人民教育出版社 (2012) 『英語一年級下冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語二年級上冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語二年級下冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語三年級上冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語三年級下冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語四年級上冊』

人民教育出版社 (2004) 『英語四年級下冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語五年級上冊』

人民教育出版社 (2005) 『英語五年級下冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語六年級上冊』

人民教育出版社 (2006) 『英語六年級下冊』

[中等学校教科書]

人民教育出版社 (2012) 『英語七年級上冊』

人民教育出版社 (2012) 『英語七年級下冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語八年級上冊』

人民教育出版社 (2013) 『英語八年級下冊』

人民教育出版社 (2014) 『英語九年級全一冊』

人民教育出版社 (2006) 『英語九年級新目錄』

[オリジナル教科書]

Heinle, Cengage Learning (2005) “Go for it! Student Edition Student Book 1”

Heinle, Cengage Learning (2005) “Go for it! Student Edition Student Book 2”

Heinle, Cengage Learning (2005) “Go for it! Student Edition Student Book 3”

Heinle, Cengage Learning (2005) “Go for it! Student Edition Student Book 4”

[日本の中学校教科書]

『New Crown English Series 1』三省堂 2011

『New Crown English Series 2』三省堂 2011

『New Crown English Series 3』三省堂 2011

<関連ホームページ>

国立教育政策研究所 (2004) 「外国語のカリキュラムの改善に関する研究
——諸外国の動向——」

https://www.nier.go.jp/koso/kyouka/PDF/report_21/pdf

投野由紀夫 (2008) 「アジア各国と日本の英語教科書比較」

[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku_kondan/kaisai/
dai3/2seku/2s-siryou3.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku_kondan/kaisai/dai3/2seku/2s-siryou3.pdf)

文部科学省 (2011) 「諸外国の外国語教育における目標について」

[https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/cyousa/shotou/082/shiryo/_
icsFiles/afiledfile/2011/01/31/1300649_05.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/cyousa/shotou/082/shiryo/_icsFiles/afiledfile/2011/01/31/1300649_05.pdf)